

綱引き実験

2020. 8. 7

「みんなでがんばろう」と言えば、これをわるく捉える人はあまりいないと思う。全員の士気を上げるためにはいいかもしれない。だが、実際にうまくいくかということとは限らない。

リングルマンというフランスの農学者が行った「綱引き実験」というものがある。1対1で全力を出して綱引きをしたときの力の単位を100としたとき、各々がもう一人ずつ連れてきて2人対2人で綱引きをやり、一人当たりの発揮できるパワーは100から上がるか下がるか。3人1組で綱引きをやりとどうなのか。もう少し人数を増やして8対8だとどうなるかということを実験したものである。

リングルマンの実験では、2人1組のときにそれぞれが発揮する力は1対1のときの93%になった。つまり、7%の手抜きをしていることがわかった。これが3人1組になると15%の手抜き、8人1組の場合はなんと51%の手抜きが見られるという結果が出た。

このデータにしたがえば、全力を出す4人と手抜きをする8人で綱引きをやり、全力を出す4人のほうが勝つことになる。これは「社会的手抜きの実験」と呼ばれるものである。

ここで言えることは、よく営業集団がやるように「一丸となって事に当たろう」というのは確かに勇ましいが、実は手抜きを誘発しているということである。営業系の研修をして営業部員の本音を聞いてみると、ハチマキをして営業部長の前で盛り上がり「出陣！」と言って威勢よく会社を出るけれど、向かうのは客先ではなくて大体、喫茶店なのだそうだ。

要は、同じ立場の仲間がいると責任が分散し、自分がやらなくてもあいつがやるだろうと考えて、手抜きを誘発することになる。だから、大事なものは、各自に責任を割り当てることである。

これを教育の現場で考えてみる。営業の現場と教育の現場を同様に考えるのは難しいが、参考になることは多い。私は、昨年から梁川高校に勤務しているが、「チーム梁川」という安易な言葉は一度も使ったことがない。この言葉が合うとも思っていない。

それよりも、先生方一人一人がユニークな存在だと考えている。ユニークというのは「おもしろい」という意味もあるが、「かけがえのない」「取り換え不能」ということである。だから、「〇〇先生には主にこういうことをやってほしい」「〇〇先生にはこういうことを期待する」といった具合に、一人一人に役割を担ってもらいたいと考えている。人それぞれの違いを生かすということである。このことがうまく機能して、結果的に「チーム梁川」となればよい。

学校現場でも、教育目標や重点目標達成のためにみんなでがんばろうとすることはできる。しかし、先生方の意識は、生徒一人一人をどうするか、どうなってほしいかのほうにいくのではなからうか。一人一人の生徒のことを思い、先生方が自分の持ち味を生かしながら努力を重ねることで、結果的に教育目標や重点目標の達成へとつながる。教育目標や重点目標は、先生方にとっての指針であり、羅針盤のようなものなのかもしれない。

人の力をいかに引き出すか。これがなかなか難しい。2学期も、生徒一人一人はもちろんだが、先生方一人一人のもてる力をさらに引き出し、その違いを生かしながら学校経営ができればと思う。